【280】

氏名（本籍）	小林忠雄（石川県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博乙第 1,463 号
学位授与年月日	平成10年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**マチ場の民俗学的研究** －旧城下町金沢を中心として－

主査	筑波大学教授	文学博士	牛島　巌
副査	筑波大学教授	博士（文学）	高桑　守
副査	筑波大学助教授	文学博士	小口千明
副査	神奈川大学教授	文学博士	宮田　登

論文の内容の要旨

本論文は，都市の伝承世界をマチ場という概念で対象化する手法とその可能性を論考し，旧城下町金沢のマチ場に生まれた技術伝承と感覚表現とを主たる課題とする民俗誌を構想した作品である。マチ場民俗とは何かを論究する序論と第一部，マチ場民俗が生成していく過程を論考する第二部，マチ場の民俗誌を提示する第三部，および総括で構成される。

序論「マチ場民俗論の可能性」は，マチ場を「農業から離れた人々や技術を携えて流浪する人々が一ヶ所に集合し，商業や手工業などの諸職に従事し，定住して生活する場」と捉え，マチ場民俗とは何かを論究する。マチ場は，マチ・トカイの二つの民俗社会としての生活空間に区別され，その生活実態には性格の違いがあることを指摘した上で，マチ場民俗の基本的な性格を検討する。マチ場の民俗は，ムラの民俗と比べたとき，その特性として積極的に変容することであり，したがってマチ場の人々は変容を求める価値観を重視してきた。著者はこの視座に依拠したマチ場民俗の解明を進める。そのため議論すべき主要な対象として，生産レベルでは技術や技能があり，消費レベルでは色彩を含めた種々の感覚表現があるとし，いずれもマチ場では常に変化が要求されているものである，とする。

第一部［マチ場の民俗－研究対象と方法－］は，第一章「マチ場民俗の基本的性格」および第二章「マチ場民俗誌の基本的構成」の2章構成である。マチ場には社会階層ごとの生活文化があり，出自を異にする多様な職業の人々が集住するので，多様な民俗が混在する。しかし，都鄙連続体論から見ると，農村部に比重がおかれ，マチ場民俗独自の基本的性格を見失う傾向がある。そこで多様なヒト，モノ，ハナシ（情報）の集中と混融に積極的な価値を見いだすマチ場の人々の意識構造に焦点を当てることが肝要である，と主張している。

以上の課題をマチ場民俗誌の内容構成にあてはめて，マチ場の変容の実態を捉えるためには，技術伝承や感覚表現などマチ場の人々が価値意識を顕著に表す事象を中心とした民俗誌を構想する必要がある，とする。

第二部［マチ場民俗の形成と展開］は，技術伝承と感覚表現を中核とするマチ場民俗の基本的性格が生成する過程を論考する。第三章「マチ場空間の原初形態」では，技術伝承を蓄積するマチ場の特質の原形を，具体的に能登石動山などの中世的山岳寺院を中心とした山地の都市的集落に求める。そこでは大規模なマチ場がつくられ，宗教・霊園・日常生活の三つに区分されたゾーニングをとっている。しかも日常生活ゾーンには製薬や金属加工の技術伝承が蓄積されていて，そこにマチ場の生活空間の原初形態が見られるとする。さらに，これらの山地の都市的集落はその後の近世城下町形成期における都市空間の原理的な祖型としても位置づけられる，という仮説

を提示している。

第四章「絡繰技術の伝承とマチ場の受容」は，江戸後期に金沢近郊で活躍した絡繰師大野弁吉をめぐる伝承を通して，マチ場の人々の西洋技術への欲求と取り込みのあり方を検証する。弁吉が西洋技術を受容し改造した絡繰技術は，マチ場では見世物などの遊戯的世界に封じ込まれた。しかしそれは表層的な事象であって，現実には技術を求める町人の間には絡繰師に対する高い評価があったことを，弁吉をめぐる数々の伝説の検討を通じて明らかにしている。

第五章「マチ場の色彩表現と変容過程」は，マチ場の持つ変容性が強く表れるトカイを視野に入れて1930年前後に起こった色彩感覚の変化を，風俗関係の資料や当時の観察記録によって検討している。とくにマチ場に人工色を含めた多種多様な色彩表現が生成する過程に注目している。さらにハレ・ケ・ケガレ論にもとづき，色彩により表現されるケガレ観がマチ場において読み取れる，とする。マチ場は，常に多色的な表現を溢れさせたケガレ状態の社会であると見て，ケの状態への回復を求め続けようとする感覚表現が指向される場所である，との解釈を提示している。

以上の基礎的な論考を踏まえて，第三部［金沢七連区民俗誌－マチ場民俗誌の可能性］は，著者の定義するマチ場の典型例として金沢市七連区をとりあげ，技術伝承と感覚表現を主たるテーマとした民俗誌を具体的に提示する。第六章「地区の概要」，第七章「七連区の民俗事象」，第八章「七連区の伝承記録－技術伝承を中心に－」，第九章「技術と感覚表現の伝承に関する考察」，第十章「七連区の民俗学的考察」の５章で構成し，江戸時代後期に急激にマチ場化した七連区を対象に，マチ場民俗誌を体系的に記述している。七連区の伝承母体の特徴は，伝承する民俗の意味を変えずに，形態だけを社会情勢に合わせることにある。職人の技術と感覚表現は個人的な才覚が要求される世界であって，従来の親方徒弟制度にみる定型的な伝承技術にとどまらず，さらにより感覚的な表現の技術や個別的な技の工夫という差異化が見いだせる。そのことが常に競争が求められるマチ場民俗を特色づけていることを，金箔職人，竹細工職人，友禅染の絵付け師などの職人たちの実態に即して，論証している。

［総括］では，以上の論述を整理した上，マチ場の人々が持つ技術と感覚表現は変容を求める性格を有する，とする。そして，かかる指向は次世代に受け継がれ，マチ場民俗の基本的性格を構成する，と結論づけている。

審査の結果の要旨

1970年代から盛んとなった都市民俗論は，1980年代に入り停滞しはじめる。それは民俗学が目先の都市の社会現象のみに目を奪われ，その世相解説と問題提起を行うだけであったためである。こうした状況に対して著者の論点は，都鄙連続体論などの従来の都市民俗論の枠組みを離れ，マチ場の伝承世界の領域を独自なものとして設定した点に特色がある。それは対象を都市と一括せず民俗語彙として表現されるマチとトカイとに区別しつつムラの伝承世界の領域と峻別したこと，マチ場の人々が変容を求める価値観を重視してきた点を明確にしたこと，マチ場で常に変容を要求されるのは生産レベルでは技術伝承であり，消費レベルでは色彩などの感覚表現であると特定したことである。こうした見解を踏まえた本論文が学界に寄与し得る知見は以下の諸点にある。

1　職人が中心的担い手となるマチ場のもつ特異性を，旧城下町金沢において解明し，技術伝承と感覚表現を主たる課題とした本格的なマチ場民俗誌を構想し提示することに成功していること。

2　常に技術や工程を変容させることに価値を置く職人の世界ならびに色彩などの感覚表現の継承という課題は，いずれも先行研究の乏しい部分であるが，著者は，これらの課題をマチ場の伝承世界を解明する起点と位置づけることで，都市民俗論に対する独自の視座を確立していること。

3　本論のマチ場についての視点は，都市的集落（中心性を持つ集落）が，現実には低位の小中心地から上位中心地までの種々の規模と階層性を持って存在しているので，その実態を捉える上で有効であること。

4　絡繰技術をめぐる伝承の記述は，江戸時代後期のマチ場の人々が先端技術を希求していたことを浮き彫り

にしており，具体例とした絡繰師大野弁吉の人間像を通して，技術の創造と伝承に関する多面的記述の統合化に成功していること。

一方，以下の諸点には将来の課題が残される。

1　中世山岳寺院のマチ場構造に近世城下町の構造モデルを求める仮説の妥当性。つまり山岳寺院が前近代の技術を蓄積する社会とする視点は，従来の研究史にもなく，山地の技術伝承とマチ場民俗とを結び付ける新しい見方であるが，その裏づけとして城下町金沢の歴史的背景をさらに整理して，論究する必要があること。

2　色彩論に一般的なケガレ論を解釈に導入したがために，マチ場の色彩感覚の地域的特徴を提示する論証が十分に深められていないことが惜しまれること。なお1930年代の都会の色彩変容論で，著者が依拠した資料の検討に考慮の余地を残していること。

以上，残された課題はあるが，本論文は都市民俗論に新しい知見と手法を提示した研究の成果であり，学界へ寄与することは明らかである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。